

三 国 志 Ⅲ

小南一郎 訳

世界古典文学全集

筑 摩 書 房

三国志Ⅲ

世界古典文学全集 第24巻C

1989年4月20日第1刷発行

訳 者 小 南 一 郎

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式 筑 摩 書 房
会 社

東京都千代田区神田小川町2-8

郵便番号101-91 振替東京6-4123

電話 東京 291-7651 (営業)

294-6711 (編集)

ISBN4-480-20354-0

井村・多田印刷／矢島製本

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社脱者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

三国志Ⅲ

小南一郎 訳

吳 書

孫破虜討逆伝第一

孫堅伝

孫策伝

吳主伝第二

三嗣主伝第三

孫亮伝

孫休伝

孫皓伝

劉繇太史慈・士曼伝第四

劉繇伝（付、劉基伝）

太史慈伝

士曼伝（付、士徽・士苞・士・蒯士匡伝）

妃嬪伝第五

孫堅吳夫人伝（付、吳景伝）

孫權謝夫人伝

孫權徐夫人伝（付、徐琨伝）

116 116 115 115 111 106 103 103 79 72 58 68 31 15 7 7

孫權步夫人伝

孫權王夫人伝

孫權王夫人伝

孫權潘夫人伝

孫亮全夫人伝

孫休朱夫人伝

孫和何姬伝

孫皓滕夫人伝

宋室伝第六

孫靜伝（付、孫瑜・孫皎・孫奂伝）

孫賁伝（付、孫鄰伝）

孫輔伝

孫翊伝（付、孫松伝）

孫匡伝

孫韶伝

孫桓伝

張顧諸葛歩伝第七

張昭伝（付、張奮・張承・張休伝）

顧雍伝（付、顧邵・顧譚・顧承伝）

諸葛瑾伝（付、諸葛融伝）

歩騭伝（付、歩闡伝）

張敵程闕薛伝第八

張紘伝（付、張玄・張尚伝）

敵峻伝（付、裴玄伝）

程秉伝

168 167 162 162 155 150 144 137 137 135 131 131 130 129 127 123 123 121 120 119 119 118 118 117

關沢伝 (付、唐固伝)

薛綜伝 (付、薛瑒・薛瑩伝)

周喻魯爾呂蒙伝第九

周瑜伝

魯爾伝

呂蒙伝

程黃韓蔣周陳董甘凌徐潘丁伝第十

程普伝

黃蓋伝

韓当伝

蔣欽伝

周泰伝

陳武伝 (付、陳脩・陳表伝)

董襲伝

甘寧伝

凌統伝

徐盛伝

潘璋伝

丁奉伝

朱治朱然呂範朱桓伝第十一

朱治伝

朱然伝 (付、朱績伝)

呂範伝 (付、呂拠伝)

朱桓伝 (付、朱異伝)

虞陸張駱陸吾朱伝第十二

虞翻伝 (付、虞汜・虞忠・虞聳・虞昂伝)

陸績伝

張温伝

駱統伝

陸瑁伝

吾粲伝

朱拠伝

陸遜伝第十三

(付、陸抗伝)

呉主五子伝第十四

孫登伝

孫慮伝

孫和伝

孫翊伝

孫奮伝

賀全呂周鍾離伝第十五

賀齊伝

全琮伝

呂岱伝

周勳伝

鍾離牧伝

潘潛陸凱伝第十六

潘潛伝

陸凱伝 (付、陸胤伝)

是儀胡綜伝十七

233 229 226 222 220 220 218 217 216 214 210 209 207 206 205 204 202 202 202 193 186 177 177 170 169

329 317 314 314 310 304 301 299 295 295 292 291 286 286 282 282 273 261 259 258 256 254 248 247 233

是儀伝

胡綜伝（付、徐詳伝）

呉範劉惔趙達伝第十八

呉範伝

劉惔伝

趙達伝

諸葛滕二孫漢陽伝第十九

諸葛恪伝（付、聶友伝）

滕胤伝

孫峻伝

孫綝伝

漢陽興伝

王楼賀韋華伝第二十

王蕃伝

楼玄伝

賀邵伝

韋曜伝

華覈伝

『三国志注』を上る表

解説

今鷹

真

年表
三国官職表

412 397 389 387 380 376 372 371 369 369 368 362 361 359 345 345 340 339 337 337 331 329

裴松之注引用書目

『三国志』ⅠⅡ訂正表

人名索引

地図

小南一郎

439 427

三
国
志
Ⅲ

凡 例

- 一、テキストは一九五九年十二月、中華書局刊行の標点本を用い、その他の諸本を参考にした。
- 一、本文の段落づけは標点本に従った。裴松之の注も標点本に倣い、「(一)」「(二)」「(三)」……の符号をつけて段落の後に附した。陳寿の文の流れを重んじたためである。
- 一、訳者が付した注は(1)(2)(3)……の符号をつけて各巻の最後にまとめたが、簡単な注および文字の異同は()に入れて訳文のすぐあとに附した。
- 一、千支の下に注記した日には、陳垣『二十史朔閏表』および『三正総覧』による。なおすべて旧暦である。
- 一、官職・裴松之の引用書・人名など、第三巻の付録に載せるものは、原則として注記しなかった。
- 一、裴松之の注のうち、音注は原則として省いた。
- 一、訳文のうち原文を補って訳した箇所には「」を付し、原文の訳と区別した。
- 一、本巻の訳と注とは、小南一郎が担当した。

呉 書

孫破虜討逆伝 第一

〔孫堅伝〕

孫堅は、字を文台ぶんたいといい、呉郡の富春ふしゅんの人である。おそらく孫武そんぶ（兵法家の孫子）の子孫なのであろう。若くして県の役人となった。

年十七のときのこと、父親といっしょに船に乗って錢唐せんたうに出かけた。

〔その途中〕たまたま海賊の胡玉こぎよくたちが艗里かふりに上陸し、商人の財物を奪い取って、ちやうど岸辺で分配しているのに出会った。旅人たちはみな「海賊たちを恐れて」とどまり、船を進もうとしなかった。孫堅は父親にいった、「この盜賊たちはやつつけられます。私に討伐させてください。」父親がいった、「おまえが手出しできるような相手ではない。」孫堅は「それにこまわず」進み出ると、刀を手にして岸に上がり、手を揮つて東西に合図をした。さも人々や兵士たちを指図して賊たちを取りこめ退路を絶とうとするかのようにであった。賊たちは遠くからこれを見て、官兵が捕えに來たと思ひ、そのまま財貨をほったらかして逃げ散った。孫堅はそれを追いかけて、首を一つ斬つて戻ってきた。父親は大いに驚いた。この事件によつて孫堅の名は人々に知られるようになり、役所は彼を召し寄せて仮の尉ゐ（警察・軍事をつかさどる役目）の役につけた。

会稽かいけいの妖賊（宗教的な反乱者）の許昌が句章で反乱を起し、みずから陽明皇帝と名のり、その息子の許韶きしやうとともにあたりの県を煽動して、そ

れに加わる者は何万という数にのぼった。孫堅は、郡の司馬しゐ（兵事をつかさどる役目）として、武術にすぐれ勇敢な者たちを募つて千余人を手に入れると、州や郡（の官兵）と共同して賊徒を攻撃し打ち破つた。熹平元年（一二二）の歳のことである。

郡の刺史の臧爰は彼の手柄を書きつづつて上表した。「それに対し」詔書が下され、孫堅は塩漬しんじく県の丞（県令の補佐役）に任ぜられた。数年して盱眙こゐ県の丞に移り、さらに下邳げい県の丞に移った。

〔一〕『呉書』にいう。孫堅の家は代々呉で役人をしていた。家は富春にあり、町の東には先祖代々の墓があった。墓地の塚の上にしばしば光が見えるという不思議があり、そこから立ち昇る五色の雲気は、上に昇つて天と繋がり、数里の広さに広がった。人々はこぞ出て出かけてこれを見物した。長老たちが語り合つていうには、「これは普通の氣ではない。孫の家はきつと盛んになるだろう。」

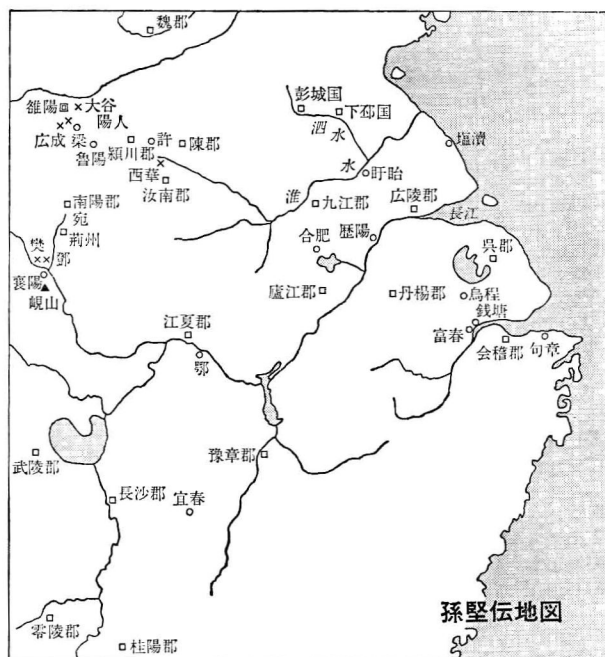
母親が孫堅を懷妊したとき、自分の腸がとび出して呉（蘇州）の閶門（西の城門）にまきつくのを夢に見た。目を覚めたが心配なので、隣のおばさんにこのことを話した。隣のおばさんがいった、「それは吉い徴かもしれないわ。」

孫堅が生まれたとき、その容貌は非凡で、性格は闊達（かつた）であり、好んで他人にはまねのできぬような行ないをした。

〔二〕『靈帝紀』にいう。許昌は自分の父親を越王の位につけた。

〔三〕『江表伝』にいう。孫堅は三つの県の次官を歴任したが、どこでも評判が良く、役人も民衆も彼に親しみなつた。郷里の知り合いやひと旗あげようと目論む若者など、孫堅の所に入りする者がいつも数百人に上った。孫堅は、彼らを手厚く待遇し、自分の身内のように扱った。

中平元年（一八四）、黄巾ちゆうきんの賊の首領の張角が、魏郡で事を起した。神靈の啓示があったと称して、八人の使者を派遣し、「善道」の教えをもつて天下を教化しつつ、一方では密かに連絡を取り合つて、「青い天帝



に護られた漢王朝に代つて黄色い天帝が立つて天下太平が実現するであらうと称号した。三月甲子の日、三十六方（方は教会区）の信徒たちは、日を同じくゆうしていつせいに反乱を起した。多くの地方がすぐさまそれに応じ、郡や県の役所を焼き、おもだった役人たちを殺した。漢の朝廷は、車騎將軍の皇甫嵩と中郎將の朱儁とを派遣して、兵を率いてこれの討伐に向させた。朱儁は、上表して孫堅を自分の配下の佐軍司馬の任につけたいと願ひ「それが認められた」。孫堅と同郷の若者で彼に従つて下邳に来ていた者たちは、そろつて彼について従軍したいと希望した。孫堅は、さらに旅渡りの商人たちや淮水、泗水のあたりの精銳の兵

士たちを募つて千人ほどの人数を集めると、朱備と力を併せ、奮戦して向うところ敵がなかつた。汝南から潁川えいせんにかけての賊たちは旗色が悪くなり、追いつめられて、逃げて宛の城に立て籠つた。孫堅は、みずから城の一方の攻撃に当ると、先んじて城壁を乗り越越えて城内に入った。士卒たちがその後について続々と攻め込んで、賊たちを大敗させた。朱備は、このときの様子を詳しく上表し、孫堅は別部司馬の官に任ぜられた。

〔一〕『獻帝春秋』にいう。張角は天公將軍と称し、張角の弟の張宝は地公將軍と称し、張宝の弟の張梁、(良)は人公將軍と称した。

〔二〕『猷帝春秋』にいう。張角は天公將軍と稱し、張角の弟の張宝は地公將軍と稱し、張宝の弟の張梁（良）は人公將軍と稱した。

(二)「呉書」にいう。孫堅は勝ちに乘じて深入りし、西華の地で苦戦におちいった。孫堅は負傷して馬から墮ち、草叢の中に倒れていた。兵卒たちは散りぢりになり、孫堅がどこにいるか分らなかつた。孫堅が騎つていた驃馬が軍営に馳せ還ると、足で地をかいていないいた。將士たちが馬について行つて、草叢の中にいる孫堅を見つけた。孫堅は軍営につれかえられたが、十日あまりがたち、傷もいささか癒える
と、また戦いに出た。

(三)「統漢書」にいう。朱儁は、字を公偉といい、会稽郡の人である。若くして学問を好み、郡の役所の功曹(こうそう)となつた。孝廉に推挙され、進士の資格を与えられた。黄巾の一揆を討伐した功績により、漢の朝廷は彼を車騎將軍に任命し、いくつか官位を昇進して、河南の尹(首都の市長)となつた。董卓は、朱儁に会つたとき、うわべはごく親しげに打ちとけたが、心中では快く思つていなかった。朱儁のほうでも「それを知つていて」心がまえを怠らなかつた。関東の地(函谷関より東の地域)に兵乱が起ると、董卓は「洛陽から長安へ」遷都を行なうべきだと主張したが、そのたびごとに朱儁が反対して董卓の意見を封じてしまつた。董卓は朱儁をいみ嫌つていたのであるが、彼に名声があるのを利用したいと考え、上表して朱儁を太僕(九卿の一つ)の位につけて、自分の副官にしようとした。朱儁は任官のきたを被つてもそれを受けようとはせず、その場で進み出いて、「国都」を選ずことはよろしくございません。それをなされば、必ずや天下の

期待にそむき、かえって山東の反乱者たちの結束を固めてやることになりましょう。私には遷都をすることの利点が分りません。」掛りの役人がとがめていった、「あなたを召して官位を授けようとするのに、あなたはそれを断った。遷都についてはご下問もないのに、あなたは意見を述べた。どうしたことか。」朱儁が答えた、「相国の副官としての任は、私のよく堪えるところではございません。遷都という無謀なくわだてのほうは、私のひどく気がかりなところですよ。おのれがその任に堪えぬところをお断りし、ひどく気がかりなところを言上いたしました。それは私が当然なすべきところなのでございます。」役人がいった、「遷都などと申すことは、もともとそんな計画はありません。ないのだ。たとえあったとしてもまだ発表されてはいない。どこから伝え聞いたのか。」朱儁がいった、「相国の董卓が私にそう話されました。私は相国から聞いたのです。」役人は朱儁を問い詰めることができず、朝廷の人々は朱儁を称賛し心服した。のちに太尉(三公の一つ)の位についた。李傕と郭汜とが争い、天子や大臣たちを威したり人質にしたりしたとき、「朱儁も郭汜に捕えられたが、剛直な性格から「それに堪えられず」その場で病気を発して死んだ。

辺章と韓遂とが涼州で反乱を起し、中郎将の董卓がその鎮圧討伐にあたったが何の成果もあげられなかった。中平三年(一八六)、司空(三公の一つ)の張温に車騎將軍を兼任させ、西方に軍を進め辺章たちの討伐を行なわせることになった。張温は、上表し願ひ出て孫堅を参謀の任につけると、長安まで軍を進めてそこに駐屯した。張温は天子の詔書でもって董卓を召し寄せたが、董卓はぐずぐずしたあと、やっと張温のもとにやって来た。張温は董卓にむかって遅れたことを責めたが、董卓の応対は不遜であった。そのとき座にあって孫堅は、進み出ると張温に耳うちしていった、「董卓めは罪を恐れず、威張って大きな口をきいております。お召しに対してすぐさまやって来なかったという罪で、軍法を發動して彼を斬られるべきです。」張温がいった、「董卓はかねてより隴か

ら蜀(しやう)一带で威名をあらわしており、いま彼を殺すと、西に軍を進めるのに依りどこを失うことになる。」孫堅がいった、「明公さまは親しく天子さまの軍を率いられ、ご威声は天下を震わせております。どうして董卓を頼りにされる必要がございましょう。董卓の申し分は、明公さまをないがしろにしたものであること、明白でございます。上に立つ者を軽視して無礼なふるまいをした。これが第一の罪です。辺章と韓遂が長年にわたって勝手なふるまいをいたしておりますが、当初すぐさま軍を進めて討伐すべきであつたのです。しかるに董卓はまだその時期ではないといつて、軍事行動を妨害し、人々の心を動揺させました。これが第二の罪です。董卓は任務を授かりながら何の手柄も立てず、お召しを受けてもぐずぐずして応ぜず、しかも思ひがかぶつてみずからを尊しとしております。これが第三の罪です。古の名將たちが將軍のしるしの鉞を執つて軍隊の指揮にあたつたとき、「罪ある者を」きっぱりと斬りすてその威を示さなかつたものはございません。さればこそ司馬穰苴は莊賈を斬り、魏絳は楊干を罪したのでございます。いま明公さまが董卓の下手に出て、すぐさま誅伐を加えられぬならば、刑罰の厳格さはこのことから失われることになりましょう。」張温はそれでも手を下す決心がつかず、いった、「おまえはひとまず引き下がるように。董卓に疑惑を持たれてはならない。」孫堅はその言葉に、やむをえず立つて退出した。

辺章と韓遂は、大軍がまもなくやって来ると聞いて仲間や軍勢が散りちりになつてしまひ、みな降服を申し入れてきた。「反乱がしずまると」軍は凱旋したが、軍隊がまだ敵と対陣してはいなかつたという意見が出て、軍功の認定と恩賞のさは行なわれなかつた。ただ孫堅が董卓の三つの罪を数え上げ、張温に彼を斬るよう進言したと聞いて、感嘆せぬ者はなかつた。

孫堅は議郎の官を授けられた。

この当時、長沙の反乱軍の將区星は、勝手に將軍を名のり、万余の人数をあつめて町々を包圍し攻撃を加えていた。それに対処するため孫堅が長沙太守に任ぜられた。孫堅は長沙郡に着くと、みずから將士を率

いて戦い、さまざまな計略を用いたので、一カ月にもならぬうちに区星たちを打ち破ることができた。周朝と郭石も民衆を率いて零陵郡、桂陽郡で反乱を起し、区星と相い呼応していた。そこで孫堅は、長沙郡の境界を越えて討伐を行ない、三つの郡は完全に平穩になった。漢の朝廷はこれまでのさまざまな功績を認めて、孫堅を烏程侯に封じた。

〔一〕「魏書」にいう。孫堅が長沙郡に到着すると、郡内はみな畏れ服した。有能な役人たちを任用し、その役人たちに命令を下していった。「良民たちを手厚く遇するように。公文書の処理は正しい手続きによること。捕えた盗賊は太守のもとに送るように。〔勝手に処刑してはならない。〕」

〔二〕「呉録」にいう。この当時、廬江太守の陸康の従子が宜春県の長をして、賊徒たちの攻撃を受け、孫堅のもとに救援を求める使者を遣つて来た。孫堅は軍の装備を整えて救援に赴こうとした。主簿（役所の事務長）の役人が進み出てやるよう進言をした。孫堅は答えた、「太守は何の文徳もなく、ただ征伐によって功績を立ててきたのだ。郡界を越えて討伐を行ない、よその土地の危機を救つてやり、そのことで〔境界を越えて軍を動かしたという〕罪を得たとしても、天下の人々に何の恥じるところがあるう。そういうと軍を進め救援に赴いた。賊徒たちはこれを聞いて逃亡した。

霊帝が逝去すると、董卓が朝政を牛耳り、京城ではいままた横暴を行なった。天下の諸州、諸郡ではそれぞれに義勇軍を組織して、董卓を討とうと企てた。孫堅もまた兵を挙げた。荊州刺史の王叡は、平素から孫堅に対して礼に欠ける処遇を取つてきた。孫堅は荊州に軍を進めると、彼を殺した。南陽まで軍を進めるころには、軍勢は数万人になつて、南陽太守の張咨は、孫堅の軍がやって来たとい聞いても、少しも驚かず悠然とかまえていた。孫堅は、牛酒を持って張咨を表敬訪問した。張咨のほうでも次の日、答礼のため孫堅のもとを訪れた。二人の間で酒が酣（あ）なつたころ、長沙郡の主簿が入つてきて孫堅に言上した、「さきに南陽

郡に通知の文書を送つておきましたのに、道路は修理されておらず、軍の資糧も準備されておられません。南陽郡の主簿を捕えて理由を問ひ正したいと思ひます。」張咨はひどく不安を感じて退出しようとしたが、四方に兵士が配置されていて外に出ることができなかった。そうこうするうちに主簿がまた入つて来て孫堅に言上した、「南陽太守は義勇軍を引き留め、賊徒の討伐を引き延ばそうとしております。どうか捕えて引き出し、軍法に照らして処分されますように。」すぐさま張咨を軍門にひきずり出して斬つた。郡中は震えあがり、孫堅の要求はすべて通つた。魯陽まで軍を進め、袁術と会見した。袁術は上表をして、孫堅に破虜將軍と豫州刺史とを兼任させた。ひきつづき魯陽城で兵士たちの訓練を行なった。いよいよ〔都雒陽（洛陽）の〕董卓の討伐に出発しようとするこゝになつて、長史（兵馬の補給などをつかさどる役目）の公仇称を派遣し兵士をつれて荊州に戻り軍糧の督促のことに当らせようとした。城の東門の外に幔幕を張つて公仇称の送別の宴が開かれ、役人たちはみな列席した。董卓は、歩兵と騎兵あわせて数万を、孫堅を迎え撃たせるために派遣したが、そのうちの軽快な騎兵数十人がまづ先にこの送別の場にのりこんで来た。孫堅は、このとき酒宴の席で談笑していたのであるが、部下の兵たちに、隊伍を整えて妄動せぬようにとの命令を出した。しばらくすると董卓の騎兵の数がだんだん多くなつてきたので、孫堅はおもむろに酒宴をやめ、人々を引きつれて城に入った。そのあとで側近の者たちに入つた、「さっき私がすぐ立ち上がらなかつたのは、そんなことをすれば兵士たちが浮き足立ち、互いをふみつけ合つて混乱し、君たちも無事に城内に戻れないだろうと心配したからだ。」董卓の兵士たちは、孫堅の軍勢が少しも乱れないのを見て、城に攻撃をかけることもせず、そのまま兵を纏めて引き返した。

孫堅は軍を移して梁の東部に軍営をおいたが、「そこで」董卓の大軍の攻撃を受け、孫堅は数十騎とかこみを破つて脱出した。孫堅はいつも赤いフェルトの幘（頭巾の一種）をかぶつていた。このとき、この幘を脱いで、側近の部将の祖茂にかぶらせた。「その幘を見て」董卓の騎兵

があらそって祖茂を追ったので、孫堅は間違つたに逃げのびることができた。祖茂は追いつめられると、馬をおり、その幟を墳墓の間に立つ焼けた柱にかぶせ、自分は草の中に身を伏せていた。董卓の騎兵たちは遠くからそれを見て幾重にも取り囲んだが、近づいてみてはじめて柱であると気づき、そこを立ち去った。孫堅はふたたび兵をまとめ、陽人^{やうじん}で戦いを交えて大いに董卓の軍を破り、董卓の都尉をつとめる華雄^{かきゆう}らの首を斬って獄門^{ごくもん}にかけた。

このとき、孫堅と袁術との間を割く者があり、袁術は孫堅を疑って軍糧を送らなくなった。陽人から魯陽までは百里余りの距離があったが、孫堅は夜をついて駆けつけ袁術に目通りすると、地面に図を画きつつ事の当否を論じていった。「私がわが身を投げ出して顧みないのは、上は国家のために賊徒を討伐しようとしてであり、下は將軍の家門の仇^{かた}を報じて差しあげようとしてのことです。私は董卓との間に個人的な怨みがあるわけはありません。それですのに將軍は遠まわしなかげ口を信じられ、かえって私のほうを疑われるのですか。」袁術は返す言葉もなく、すぐさま軍糧を手配させた。「それを見とどけて」孫堅は軍營に戻った。董卓は、孫堅が勇猛であるのを畏れて、將軍の李傕^{りけつ}らを使者を立てて和睦^{わくもく}を結びたいと申し入れ、孫堅がその子弟たちのうちで州の刺史や郡の太守に任じたい者を列べて書き出せば、朝廷に上表して彼らを任官させてやろうともかけた。孫堅がいった、「董卓は、天に背いて無道をなし、王室をくつがえした。いま、おまえの一族を皆殺しにして、天下に示さねば、おれは死ぬにも死ねない。どうしておまえと好を通じたりすることがあろう。」さらに軍を大谷^{たいく}まで進めた。洛陽から九十里の距離である。董卓は、まもなく都を遷して西のかた関中に入り、雒邑^{らくいつ}（洛陽）を焼きはらった。孫堅は、そこで軍を進めて洛陽に入ると、皇帝たちの陵墓を修復し、董卓があばいた所を埋めなおした。それが終ると、軍をひきいて戻り、魯陽に留まった。

「一」「江表伝」にいう。孫堅はこのことを聞くと、胸をたたいて嘆息していった。「張公があつたとき私の言葉に従つておれば、朝廷はいま

こんな災難にあわずにすんだものを。」

「二」「王氏譜」を見てみるに、王叔は、字を通耀^{つうよう}といい、晋の太保の王祥の伯父である。

「呉録」にいう。王叔はもともと孫堅とともに零陵・桂陽の反乱者たちを討伐したのであるが、孫堅が武官であることから、孫堅を軽んじた言葉を吐くことが多かった。王叔が董卓討伐をめざして兵を挙げると、もともと武陵太守の曹寅^{そうぎん}と仲が悪かったことから、まず先に曹寅を殺すのだといひ立てた。曹寅は懼れて、案行使者・光祿大夫の温毅^{おんぎ}の檄文を偽作して孫堅に送りつけ、王叔の罪状をのべ、彼を捕えて処刑し、そのあとから報告の文書を上るようと命じた。孫堅はすぐさま檄文を奉じ軍を動かして王叔を襲った。王叔は兵がおしよせたと聞き、樓に登って兵士たちをながめやると、要求は何かと尋ねた。孫堅の先鋒の兵士が答えた、「兵たちは久しく戦いの中に辛苦いたしておりますのに、賜わった恩賞は、衣服を作るにも足りません。刺史のものにまいり、もう少し資金がいただけますようお願いするのです。」王叔がいった、「本官がどうして物客しみをしたりしよう。」すぐさま府庫を開いて、兵たちがみずから入って調べ、残っている物があるかどうかを見させた。兵たちが樓の下まで進んできたとき、王叔はその中に孫堅がいるのを見つけ、驚いていった、「兵たちが勝手に恩賞を要求しているのに、孫太守どのはなぜその中におられるのか。」孫堅がいった、「案行使者の檄文を奉じてあなたを誅殺するのです。」王叔がいった、「私に何の罪があるというのだ。」孫權がいった、「事態を看過された罪なのだ。」王叔は絶体絶命になり、金を刮つてそれを飲み、自殺した。

「三」「英雄記」にいう。張咨は、字を子議といい、潁川^{えいせん}の人で、彼もまた名のある人物であった。

『献帝春秋』にいう。袁術は上表して孫堅を仮の中郎將の官につけた。孫堅は南陽に到ると、太守に檄文を送つて軍の食料を求めた。張咨は主簿の役の者にどう処置すべきかを尋ねた。主簿が答えた、「孫堅は

隣郡の太守であつて、この郡で食料調達を行なういわれがございません。」張咨はそこで食料を与へなかつた。

〔四〕『呉歴』にいう。孫堅が南陽までやって来たときのこと、張咨は孫堅に軍糧を供給しないのみならず、孫堅と会おうとしなかつた。

孫堅はさらに軍を進めようとしたが、「このまま置いておけば」張咨の存在が後の患となるであらうと憂慮した。そこで偽つて急病になつたふりをした。兵士たちはみな心をおのかせ、巫医たちが呼ばれて、山川の神々への祀がなされた。側近の者を張咨のもとに遣つて、病氣が重いので、兵士たちを張咨にあずけたいと思つていと伝えさせた。張咨はこれを聞くと、その兵が自分のものとなるといふのに心を引かれ、すぐさま歩兵と騎兵五、六百人をひきつれて孫堅の軍營を訪れ、孫堅を見舞つた。孫堅は臥たまま張咨に会つたが、やがて突然に起き上がる、剣を執つて張咨をとりつけ、その場で執て斬り殺した。

以上の筋書きは、『三国志』本伝の記載とは同じくない。

〔五〕『英雄記』にいう。孫堅が董卓を討伐するために、梁県に入り陽人にまで軍を進めたときのこと、董卓のほうでも軍を出し、歩兵と騎兵あわせて五千でこれを迎え撃つた。「このときの董卓がわの軍は」陳郡太守の胡軫が大督護となり、呂布が騎督となり、その他、歩兵や騎兵をひきいる将校や都督が大勢そろつていた。胡軫は、字を文才といい、せっかちな性格で、前もって公言していた、「今度の出陣は、要するに青綬（郡の太守）を一人斬れば、それでござまりがつくのだ」と。部将たちは、これを聞いて反感を持った。軍は広成まで進んだ。陽人城から数十里の距離である。日が暮れ、兵士も馬も疲労困憊し、当然そこで宿営すべきであつた。それに前もって董卓から受けていた指令にも、広成で宿営し、馬にかいばをやり兵士たちにも腹ごしらえをさせたあと、夜に乗じて軍を進め、夜のあけかかるのを待つて陽人城を攻めよとあつた。部将たちは胡軫を心よからず思い、敵方が彼の作戦をだめにしてくれればよいと望んでいた。「そこで」呂布たちは、「陽人城にいた敵は逃走した。今のうちに追わねば、逃がして

しまうぞ」という情報を流し、そのまま夜に乗じて軍を進めた。しかし城中の守備態勢はよく整つており、不意をついても、攻め落すことはできそうにもなかつた。このようにして軍吏や兵士たちは飢渴し、人馬ともに疲労困憊し、加えて夜中に到着したため、塹壕も堡壘もなかつた。甲冑をぬぎすてて休息しているとき、呂布はまた兵士たちを驚かせようとして「城中の敵が出撃してきた」との情報を流した。軍勢は混乱におちいり、算を乱して逃走した。みな甲冑を棄て、自分の鞍馬も見つけられなかつた。十里余りを逃げたが、気がついてみると、なんとしたことか敵兵などはどこにもいになかつた。夜が明けかかつてきたのもとの宿営の場所に戻り、武器を拾つて城に攻め寄せようとしたが、城の守りはすでに固められ、塹壕もすでに深く掘られていた。胡軫たちは城を攻め落すことができず、軍をかえした。

〔六〕『江表伝』にいう。ある者が袁術にいった、「孫堅がもし洛陽を手に入れたなら、もうあなたの命令を聴きませうまい。そうなったら、いわゆる狼を除いてかえつて虎を得た、ということになります。」これを聞いて、袁術は孫堅に心を許さなくなつた。

〔七〕『江表伝』は孫堅のこのときの言葉を次のように記録する、「大きな手柄がもう一歩で成るうとしながら軍糧の供給が続かない——これこそ呉起が西河の地で歎息し涙を流した理由であり、樂毅が成功を目の前にしつつ恨みをのんだ理由であるのです。願わくは將軍よ、このことを深く考えください。」

〔八〕『山陽公載記』にいう。董卓は長史の劉表にむかつていった、「関（函谷関）の東にいる軍勢は、しばしば敗戦を被つて、みなおれを畏れ、何の出手もようしない。ただ孫堅だけは他のやつほど馬鹿ではなく、人をなかなかうまく使う才能がある。部将たちに伝えて、こいつを警戒するよう周知させねばならぬ。おれは昔周慎とともに西方の征伐に出たことがある。周慎が辺章と韓遂とを金城に包囲したとき、おれは張温に、その配下の兵士をまわして周慎の後つめをしてやつてほしいといったが、張温は聴き入れなかつた。おれがこのとき、

そうした状況を上言したのは、周慎にはけっして敵を打ち破れぬことを知っていたからだ。中央政府には今もそのときの関係文書がのこっている。「しかし」上表に対する返答が下されぬうちに、張温はさらに先零で反乱をおこした羌族の討伐をおれに命じた。西方の地はまもなく平定できると考えていたのだ。おれにはそうはゆかぬことがよく分っていたが、出発せぬわけにはゆかず、討伐に出た。それに際し別部司馬の劉靖をあとの留め、歩兵と騎兵四千を率いて安定に駐屯して遠くから牽制させた。反乱をおこした羌族はすぐさま軍をめぐらせ、退路を断とうとしたが、おれが少し攻撃を加えると簡単に道が開けた。これは安定に軍勢がいるのを畏れたためで、賊徒たちは安定に数万人がいいるだろうと思っており、実は劉靖しかおらぬことを知らなかったのだ。このとき、ふたたび上表して状況を伝えた。ところで孫堅も周慎のもとで従軍していたのであるが、彼も周慎にむかい、『自分は一萬の兵をひきいて金城にゆくので、周慎が二萬の兵をひきいて後づめとなつてほしい、辺章と韓遂のたてこもる城中にはこれまでに穀物の貯えがしてなかったのだから、きつと外部から運びこんでいるにちがいないが、周慎のひきいる大軍に畏れをなし、軽々しくは自分の軍と戦いを交えることはないであらう、しかも自分の軍は敵の糧道を断つには十分である』と述べた。あいつらが孫堅の意見を用いておれば、羌族をもとの住み家に戻らせることができたにちがいない、涼州も安定することになっていたかもしれない。「しかし」張温がおれの意見に従わなかったのみならず、周慎も孫堅の意見を用いずに、みずから金城を攻撃した。金城の外側の城壁をこわすと、使者を馳らせて張温にそのことを伝えた。自分では数日ならずして城を抜くことができると考えていたのだ。張温もこのとき自分の計略が当たったと思った。ところが賊徒どもがはたして葵園峽を占領して道を断つたため、周慎は輜重を棄てて逃げた。おれが計ったとおりであったのだ。朝廷はこのこととおれを都郷侯に封じたが、孫堅は佐軍司馬でしかなかったところから、他の人々と変らぬ恩賞を受けただけだった。しかし不満そうな

様子もなかった。劉艾がいった、「孫堅はときに優れた計略をあらわしますが、もともと李傕や郭汜にも及ばぬ人物です。聞くところによれば美陽亭の北で歩兵と騎兵千人をひきいて賊徒と合戦して瀕死の重傷を負い、印綬まで失ってしまったとのことです。これでは手腕があるとは申せませんまい。」董卓がいった、「あのとき孫堅は、てんでばらばらの義勇軍を集めただけで、手勢も賊徒ほど精鋭ではなかった。それに戦いには得手不得手があるものだ。ただ中原の大勢を詳細に考えてみても、結局どういふことになるのかまったく不明で、「そうした中で孫堅の存在が気味悪く感じられるのだ。」劉艾がいった、「中原のこわっぱどもが民衆をかりたてて反乱をおこしておりますが、そのほこ先の鋭さはわれわれに及ばず、甲冑の堅牢さ、武器の鋭さ、弩弓の強さもわれわれには及びませんから、どうして長く勢力を保つことができましよう。」董卓がいった、「そのとおりだ。二袁(袁紹・袁術)と劉表と孫堅さえ殺せば、天下は自然とおれに服従することになる。」

「九」『江表伝』にいう。古い都はからっぽになり、数百里の間、人家の炊煙もあがらなかつた。孫堅は軍を進めて城内に入ると、心がむすぼおれて涙を流した。

『吳書』にいう。孫堅は洛陽に入ると、漢の王室の宗廟を掃除し、太牢をそなえてお祭をした。孫堅は軍を洛陽城南の甄官井のそばに駐めていたが、「井戸から」朝ごとに五色の気がたち上つたため、軍中あげて驚きいふかり、その井戸で水を汲もうとするものがなかつた。孫堅が井戸にもぐって探らせたところ、漢の伝国の璽(天子のしるしの印璽)がみつかった。その印文には「受命于天、既寿永昌(命を天より受け、既に寿くしてまた永昌ならん)」とあり、形は上が円く下が四角で四寸の大きさ、上の紐をかける所には五匹の龍がわたかまっています、そのうちの一つは角が欠けていた。昔、宦官の張讓たちが反乱をおこし、天子をおとしてつれ出して逃げたとき、天子のそばづかえの者たちも離ればなれになり、そのうちの印璽をつかさどっていた者がこれを井戸に投げこんだのであった。

『山陽公載記』にいう。袁術は天子を僭称しようとしていたので、孫堅が伝国の璽を手に入れたと聞くと、孫堅の妻を人質にしてそれを奪い取った。

『江表伝』にいう。『漢獻帝起居注』を見ると「天子は〔難を避けていた〕黄河のほとりから帰り、六つの印璽を閣の上で見つけた」とある。また太康（二八〇—二八九）の初年、孫皓は〔降服のしるしとして晋の武帝に〕黄金製の印璽六個を送ったが、その中に玉製のものはなかった。これが偽物であったことは明らかである。

虞喜『志林』にいう。天子の六璽というのは、その印文が、「皇帝之璽」「皇帝行璽」「皇帝信璽」「天子之璽」「天子行璽」「天子信璽」の六つである。この六つの印璽は、それぞれを用いて封をする命令書の内容が異なるので、文字もちがうのである。『獻帝起居注』に「天子は黄河のほとりから帰り、六つの印璽を閣の上で見つけた」というのがこれのことである。〔それとは別に〕伝国の璽があつて、それは、漢の高祖がおびていたもので、もともとは秦の皇帝の璽であつた。それが代々伝えられてきたので伝国の璽と呼ばれたのである。考えるに、伝国の璽は、六璽とは別のものであつて、両者をつ一つして論じてはならない。応劭の『漢官儀』や皇甫謐の『帝王世紀』も六璽のことを論じているが、そのいうところは私の説と完全に符合する。『漢官儀』は、伝国の璽の印文には「受命于天、既寿且康（命を天より受け、既に寿くして且つは康からん）」とあるところ。「且康」と「永昌」との二字に違いがあるが、『呉書』と応劭とどちらが正しいのかは分らない。黄金や玉の純粹なものは、すべて光気を発する。加うるに伝国の璽という神器・秘宝であつてみれば、その輝きはことさらに明るく、〔井戸の上にただよつた五色の気は〕一代の奇観であり、将来にまで語りつがれる不思議な出来事であつたにちがいない。しかるにこうした出来事に理解できない点があるからといって、強いてでたらめだとしてしまうのは、いわれない言いがかりではなからうか。陳寿が破虜伝（孫堅伝）を書くに際しても、このことを無視して記録しなかった

のは、彼もまた『獻帝起居注』の記事にまどわされて、六璽と呼ばれる印璽が別にあり、伝国の璽と合せると七つになることが分らなかったからなのである。呉の時代には、玉を細工する技術がなかったため、呉の天子は黄金で印璽を作った。印璽が黄金でできていても、印文には違いがなかった。呉が降服して晋に印璽をさし出したというのは、『呉王朝で使用していた』天子の六璽をさし出したもので、先に手に入れた玉璽のほうは、古人の使用していた昔の印璽で、実際に使用できるものではなかった。天子の印璽に、いま伝国の璽がないからといって、孫堅がそれを得たということを否定してしまうのは、物事のすじ道に通じていないからにすぎない。

臣裴松之が思うに、孫堅は、漢の王朝のために義兵を起した者たちの中でも、特に忠烈の名が高かった。しかしもし彼が漢の皇帝の神器〔である玉璽〕を手に入れながら、匿してそれを公表しなかったとすれば、それは秘かに王室に対して二心を懐いていたことになり、どうして世間でいわれたような忠烈な人物などであらう。呉の史官たちは〔漢の玉璽が呉に伝わったことを強調して〕「国のはまれとして」としているが、それがかえって孫堅の美徳を損ずることになるのが分つていないのである。このことが事実であったとすれば、玉璽は孫堅の子孫に伝わっているはずであるが、たとえそれが六璽のうちに数えられないものであつたにしても、常人が持つべきものではない。孫皓が降服したときにも、六璽だけを晋に差し出して、伝国の璽は宝として私蔵しておいたりしてよいはずがない。天子となるべき命は、天から授かるものであつて、帰順した孫皓の家から受けたりするものではない。もし虞喜のいうとおりであるとすれば、この玉璽は今も孫氏の家に伝わっているはずである。匹夫は単に璧を懐いただけでも罪にかかる。ましてやこうした宝物を私蔵してよいはずがないのだ。

〔十〕「呉録」にいう。この当時、関東（函谷関以東）の諸州郡は、互いに相手を兼併して自己の勢力を伸ばそうとつとめていた。袁紹は会稽の周喦を豫州刺史に任じ、彼を遣りこんで武力で豫州を奪い取ろう